

リーダーになる機会をつかむ

JCI本部にて、JCI会頭のアルヘネス・アングロ君と「JCIが目指すリーダー像」について熱く語り合った。シャイだった彼がJCI会頭にまで成長した契機は、先輩から受け継いだ「愛のバトン」だったという。

「リーダーの本質とは」「権利より「義務」」

中島 今日貴重なお時間をありがとうございます。今日はアルヘネスJCI会頭のスローガン「Lead by example」(導くことが我々の義務である)の精神に大変共感しており、ぜひ、あなたの声を全国メンバーに、直接届けたいと願ってここに来ました。

アルヘネス JCI本部へようこそ！国は違えど、私たちは一つのグローバルチームです。とても嬉しいです。

中島 現在、アルヘネスさんはJCI会頭を、私はJCI日本の会頭を任じていますが、「JCIのリーダー」として、日頃どのようなことを意識されていますか。

アルヘネス リーダーと聞くと、

「生まれもった特別な才能を活かす人」と思われがちですが、そんなことはありません。その証拠に、私はごく普通のどこにでもいる人間です。リーダーには誰もがなれる。そのことをまず強調しておきたいですね。ただ、「リーダー」の中には、

時に「権利」に溺れてしまう人もいます。政府や組織に対していつも要求ばかりをしたり、あるいは「リーダーらしさ」を求めるあまり、型にはまったリーダー像を演じてしまったりすることもあります。でも、真の「リーダー」とは「権利」と「義務」



ゲスト——アルヘネス・アングロ

国際青年会議所2022年度会頭

や地域のことを思い、国を何とかしたいと努力する彼の前では、当時の私はいかに子供でした。

でも、そんな私が、この組織が提供する「善行と成長の機会」を経験する間に成長していき、いつの間にか成長していき、やる気のないただの若造が、真剣に故郷を思い、母国を築き、世界の調和に少しでも貢献したいと願うようになったのです。これは正に、ア

ルヘネスさんが言われる「Be the Best」の精神が、JCIに派々と受け継がれている証拠ではないでしょうか。

シャイな18歳が入会

そこで奇跡が起こった。アルヘネス。私はとても驚いていますが、なぜなら士さんの体験が、私

の歩んできた道のりと非常に重なるからです。私はジャーナリストとして、今でこそ多くの取材をしています。ですが、もともと非常にシャイな人間だったんです。

中島 えっ、アルヘネスさんはジャーナリストだったんですか？しかも内気だったとは、とても信じられません……。

アルヘネス 実はそうなんです。私は18歳でJCIに入会するまで、とても内面的で、クラスの中で一人隠れているような女子でした。人から何か尋ねられても「はい」「いいえ」も言えなかったんです。

中島 そんなにシャイなのにJCIに入会された経緯は何でしたか。

アルヘネス 漠然と「社会への奉仕」をしたいた気持ちがあったんです。私の国ベネズエラは政治・経済危機が長く続き、昨年600万人が母国を捨て、他国に移住、働きに出るような国です。何か自分にもできることをしたかった。

そんな18歳の頃、テレビで青年経済人として、ベネズエラにあるJCIエスリアの理事長が登場しました。そこに記されている電話番号を必死でメモし、思い切って電話

機会を提供する義務を担っているからです。「JCIメンバーになる」とは、家族・地域・国家・世界をメタな視点で眺め、各課題に向き合う責任を持つことなのです。

中島 非常に胸を打ちます。というの私もJCI入会当初、義務や責任などは全く無縁の人間だったからです。まちをどうしたいとか、自他ともに成長したいとか、何も考えていなかったんです。

アルヘネス 驚きです。今の士さんの姿から想像できませんね(笑)。

中島 お恥ずかしい限りですが、今も思い出す光景があるんです。入会間もない頃、国際アカデミーで組んだパディが、パングラデシユの人でした。「士はなぜJCIアカデミーに参加したのと聞かれた際、「O.Mの先輩が行くと言うから。友達も欲しかった」と答えた私に、彼は猛烈に怒り始めました。

「私はJCIアカデミーへの参加を通じて、母国と世界をより良くしたいと思っている。君とはパディを組めないよ」。

中島 パングラデシユは経済的に非常に厳しい国です。本気で家族

「やってみたら」が成長を促す

をかけたなら、「明日ミミディングが
あるからおいで」と。
中島 そこからJCI歴が始まった
のです。

アルヘネス いえ、現地で入会を
誘われたものの、この時も無言で
帰ってきてしまったんです。でも
自室に籠もって自問自答しました。
「アルヘネス、本当にいいの。この
ままでは志望するジャーナリスト
にもなれないぞ」と。そこで勇気を
振り絞って、入会したんです。

中島 なるほど。JCI入会後は、
徐々に変わっていったのですか。
アルヘネス 入会の翌月に弁論大
会があり、驚くべきことに優勝し
たんです。若く入会したら勝た
せてくれたのかな?と思いましたが、
その後の全国大会でも優勝し
て、世界大会に進出しました。

そこで優勝できなかったので
すが、私の中では「勝利」を実感し
ました。何に勝てたのか、自分に勝
てたのです。それまで感じられな
かった自己肯定感、自信、マインド
セット、行動力……。私のすべてを

変えることができたんです。

今、私はコーチング会社を経営
しています。すべては18歳でのター
ニングポイントが起点です。私の得
たものを、今度は他者に還元した
い。かつての私のように、本人もま
だ知らない眠れる能力・意欲を掘
り起こしていきたいのです。

中島 素晴らしいお話です。偉大
な人は、自分自身の転換点をス
トーリーとしてしっかりと語れるも
のです。自分自身の棚卸しがで
き、言語化することでパッケージジ
ングし、他者に自らの気づきを継承
していける人だと再認識しました。

アルヘネス そこがJCIのすごい
点だと思うんです。優れた才能も実
力も、それどころかビジョンすら持
たないごく普通の人間が、多様な
ポジションに挑戦できる。JCIの
仕組みを通じて、自カも知らなかつ
た才能に気づいていくのです。

「あ、自分にはこんな能力もあつ
たんだ」、我ながら驚く体験の積
み重ねが、過去に何人も傑出した
リーダーたちを生み出してきたの

Tsuchi NAKASHIMA

ではないでしょうか。

中島 JCI日本には、「ハイカ
YESか、喜んで」という言葉が
あります(笑)。嫌でも泣いても自
分には無理と思っても、「やってみ
たら?」言われたら挑戦する。そ
れが自分で驚きの結果を生み出
すことは、多くのメンバーも経験済
みだと思えます。しかし、世界も日
本と同じとは、私は今、とても新鮮
な喜びを感じています。

アルヘネス 不思議です。私
はシャイだった25年前と全く同じ
人間です。でも、「はいも」「いいえ
も」発せられなかった人間が、今や
全世界に言葉を発信している。ま

るで奇跡のよ
うですが、現実です。

JCIが提供する「発展と成
長の機会」が、私を変え、パワーを
引き出ししてくれました。このポジ
ティブ・チェンジは誰にでも起こる
ことなんです。

眠れる才能を呼び起こし 「過去最高!」を更新する

中島 JCI活動で、ご自身の何が
一番変わったと感じていますか。
アルヘネス 「自分の可能性を信じ
る勇氣」です。自分すら信じていな
かった私の能力を、JCIの仲間や

会頭対談

アルヘネス・アングロ × 中島 士

リーダーの素質は誰にでもある

先輩は信じてくれました。まだ若
く経験もないのに、「やってみたら」
よJCI機会を与えてくれたのです。
中島 「今年度の役割はこれ」「次年
度は何に挑戦してみよう」と、周囲
が変化を促してくれるんですよ。
アルヘネス 「一つひとつの機会や
挑戦は、小さな登山にすぎません。
でもコツコツと小山を登り続ける
うちに、いつの間にか壮大な山脈の
上にいることに気づくのです。」

大切なのは登頂そのものより、
むしろそこまでの道のり、プロセ
スです。もちろん最終的な山頂を
ゴールとして描くビジョンも大切
ですが、一気にエレベーターを目指
しても、普通の人間は「自分には無
理」現実を見て諦めてしまいます。
他人から見たら小さな達成でも
自分では「過去最高!」を更新して
いくことが大切だと思います。

中島 私は今年、一人に無条件で奉
仕する「愛」がJCIの前提である
と述べています。今のお話は、ま
さに先輩から「やってみたら」と提
案される言葉そのものが「愛」です

ね。先輩が自分に、自分が先輩に、
脈々と受け継がれる「愛」。それが
JCIのいう「発展と成長の機会」な
のだと解釈しました。
アルヘネス そうし世代間のパ
トンは、多くの組織でも見られる
でしょうが、JCIはそれが仕組み
化されているのがすごい。このポジ
ティブ・サイクルが、何十年も回転
し続け、その輪に参加してきた若
者に、次の世代に渡すべきパトンを
継承してきたわけです。

中島 実は今年、私はこのJCIと
いう組織を「幸せを生み出し続け
る装置」と表現してきました。「装
置」というと冷たく聞こえるかもし
れませんが、時が移り変わり、人
が入れ替わっても、ある種システ
マティックに幸せを生み出すリー
ダーを排出し続ける組織であつて
ほしいのです。しかしこの願いは、
時空を超えてJCIが長年守り続け
てきたレガシーだったのです。

アルヘネス JCIは多様な人々が
集まる組織です。中には知識、情
熱、スキル、経験も抜群!という

生まれながらのリーダー的存在も
います。でも、私たちがより気にか
けるべきは、「情熱はあるがスキル
を持たない人」や、「情熱もスキル
もない人」かも知れません。
かつての私たちのような若者に、
まずは様々な体験を積んでもらい、
「やってみたら」と機会を提供する
ことで、人々は育っていきます。繰
り返しますが、誰もがリーダーに
なる素質は持っているのです。

中島 アルヘネスさんがJCI会
頭の時、JCI日本の会頭をで
きて本当によかったです。
アルヘネス 私こそ、土さんが会頭
として国際的に築かれてきたつな

1983年、ベネズエラ第二の都市マラカイが生まれ、ジャー
ナリスト、コンサルタント、フロリダグローバル大学政治
センター研究部長、2001年JCIスリランカ会後、08年理事長、
11年JCIベネズエラ会頭、14年JCI副会頭、19年JCI常任
副会頭などを歴任。

が、活動を誇りに思います。あな
たの挑戦は私の挑戦、あなたの課
題は私の課題です。私たちは今、激
変の時代を生きています。課題は
山積していますが、将来、2022
年度の活動を誇らしく思い返すは
ずです。もちろん失敗もするでしょ
うが、すべてが学びです。成功も失
敗もポジティブ・サイクルの一環と
して、次年度に共有していきたいよ
う。そうすることで、JCIの活動は
今後も脈々と続いていくはずと私
は信じています。

中島 これからもそれぞれの生き
る場所で、人財を生み出し続けて
いきましょう!

Argenis ANGULO

